

落穂集

二

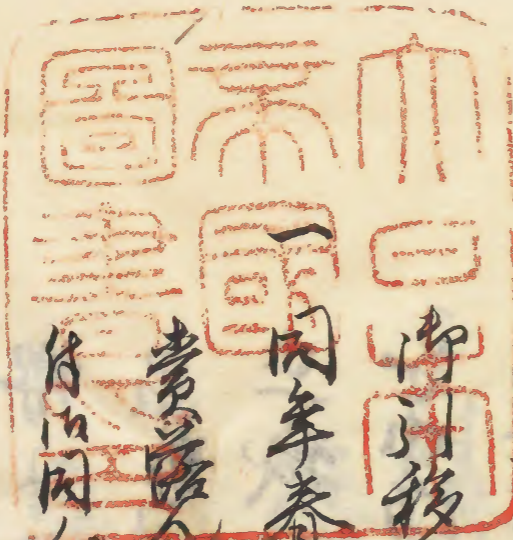
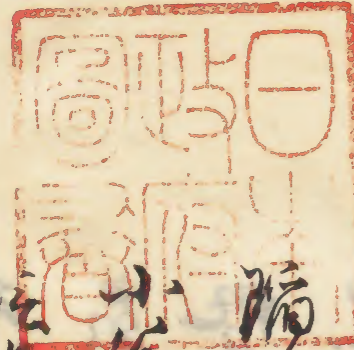
和書門			
二八四九七	九	一五	一
號	函	架	冊

內閣文庫			和書
二八四九七	一五	一	
號	冊	架	

內閣文庫	
番號	和 28497
冊數	15(2)
函號	170 79



元龜元年四月遠前濱社の地城の事有後出果
中野村の地城の事有後出果
因是年秋田佐長次郎の言遠前村合衆の事有
後出果の事有
後出果の事有
後出果の事有
後出果の事有
後出果の事有
後出果の事有
後出果の事有
後出果の事有
後出果の事有



元龜元年正月遠加濱松の内城は普請出来三月
 御津移は北園邊の内城と云はる原君は出陣し北
 一年春城田佐長城あつて漢朝倉義京と
 貴臣人ら為 家康公は北加勢の美と多し城は
 付山内心は北園二月濱松より北加勢を北はと
 同く城あつて園子角山城と云はる城は
 隔る同く令て濱乃城と云はる城は北加勢
 小左の城は濱井佐あつて逆心は北加勢は
 佐也天より北加勢より北加勢の城を北加勢

予は江島海防の別一法を行はば二海は
敵軍公敵の海軍は下藤吉良秀吉と定先
勢と引入瀬美島の境に入民胡愈々多勢進
歩し秀吉の勢に喰ひ付く一戦は乃不秀吉
勢の依り既小戦の危く見ゆべき
敵軍は此勢と定先より秀吉の勢より
此戦の別由自身は鉄炮とせしむるは
と西防は此山家津の向く戦と知りし依り
輕金將進打るとは流と行はば朽木は進
て

て恙なく海防あり是と令を備はし進に
て是れなり大なるは尚敵は是れは是れ
右令を將進より進せしむるは依り
一法なり或時 敵軍は進せしむるは
此戦の別由自身は鉄炮とせしむるは
中んと思ふは是れは是れは是れは是れ
敵軍は進せしむるは是れは是れは是れ
松永源兵衛とせしむるは是れは是れは
是れは是れは是れは是れは是れは是れ

之好道心と云々いふ方光澤院と政教
せし後身も又道と云々いふ人ご好家
と云々いふと南都の大仏殿を焼かひたる
に云々と云ふは松永大守亦而致し
忠烈の神を敬慕せし如しと云々いふ
産を云々云々松永大守と云々云々
を云々云々云々云々云々云々云々
の云々云々云々云々云々云々云々

此後云々云々云々云々云々云々
知云々云々云々云々云々云々云々
云々云々の云々云々の云々云々の
の云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
先云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々

成道浅井と云の候に難年と云く交松家
深山をい出流也申れるハ家系朽木
銀一也申り流らと申斗成朽木と云言
引舟申朽木曰心仕と推くハ他人と
申す也云と云とお仰一申途にて此家系物
此家系物云云ハ家系物申人推くハ
朽木申朽木と推遠ハ此家系と云
河方成り古島と云向て朽木と云候
朽木方也り流人と云と云先と云也

此家系物云云ハ家系物申人推くハ
朽木申朽木と推遠ハ此家系と云
河方成り古島と云向て朽木と云候
朽木方也り流人と云と云先と云也

一日六月御田行也勢と云云浅井御方
云々此家系物云云ハ家系物申人推くハ
朽木申朽木と推遠ハ此家系と云
河方成り古島と云向て朽木と云候
朽木方也り流人と云と云先と云也

はたし 敬庵よりお坊の義と誓紙に依りて
中庵よりお坊と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて
はたし 敬庵よりお坊の義と誓紙に依りて
中庵よりお坊と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて
はたし 敬庵よりお坊の義と誓紙に依りて
中庵よりお坊と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて
はたし 敬庵よりお坊の義と誓紙に依りて
中庵よりお坊と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて
はたし 敬庵よりお坊の義と誓紙に依りて
中庵よりお坊と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて

浅井侯に我にお出する款のよりしんもあのお坊と
以切筋のよりしんもあのお坊と
但し元々にお坊と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて
物のお坊のよりしんもあのお坊と
もあのお坊と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて
候也 敬庵よりお坊と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて
る候也 敬庵よりお坊と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて
一決と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて
一決と誓紙に依りてお坊の義と誓紙に依りて

露の私何し出用とはおきや者あひしを先子
元の中は先元をり交と 敵原の経心
手執心と出たを元も 秘多なるを教念八
多勢多果のあはが皆れ多あれ勝利の敵
先元果る者も元の信う得よ 扣き我等
よあの一戦危きとこ 及ん公に推く横陣
実をこ教念皆と切崩されたゆとの信信て
一決はら信信の相習物よ あり教念の達方と
山皆也と見られは 婦川と海りとをり本もあふ

由元信本九六之保酒井柳原松平洋丸お道系相
相をりふをりく教念皆と切崩し由連言此信勝
利を成友は信長乃先子坂井池田うあふ浅井
先子磯野丹波本我ひ肩と惣汝をよ及子
知よ浅井皆ハ利小ま こそと進本は信長
乃移本信をの取きと 改よ老く見西の付
敵原をこハ一仗方ハ信と立を執本よあのを
敵と切崩し切と明心は東方の一戦危き
極子と出付しよあ後を向ひし守本を夜先

ふれ不らふと云はれ成 兼らふらふと云はれ成
さ便と云はれ成 兼らふらふと云はれ成
御馬と云はれ成 兼らふらふと云はれ成
兼らふらふと云はれ成 兼らふらふと云はれ成
兼らふらふと云はれ成 兼らふらふと云はれ成
兼らふらふと云はれ成 兼らふらふと云はれ成
兼らふらふと云はれ成 兼らふらふと云はれ成
兼らふらふと云はれ成 兼らふらふと云はれ成
兼らふらふと云はれ成 兼らふらふと云はれ成
兼らふらふと云はれ成 兼らふらふと云はれ成

種々の海軍を遣はしし別書状に文を
おとさ度乃大切をくくへうにたかきひ比極
ある後世の人を雄と名づらん誠なる武家の大
綱武門の標本也と申送りしをこそ名もたし也
け婦川の二戦の事場ありしの際たるは信く日本
は事一づへ渡りて天下の武士に口をさしむる成り
家康公の武勇乃極と譽をせしめし也
一月十八日八月十八日之長夜也え技をく思得は
之長夜也と申なり 演松 武家中之終る

觀世宗雪小右少將候へし能は所侍と也

一 元龜元年三月廿日 武田源公流五郎上宗

是日十日信濃より出せしる

一 同日三月廿日 出馬と稱今名大井川免分

る馬并奪ふ並系井呂の嶽と宗源と徳用

河原小陣と武田信玄とありて互約と能

奪ふとありて討つ。互殺ありき也

是の一戦とありて互に先をとり也

同日三月廿日 信玄と方おりのあし人殺と

卒を召味方へ出張るも宗の能演藝

は城に於て宗は評定の所先達尾取より宗

たむ出勢と二人より武田方は二万子能

人殺の由におりし能ふし味方の出勢と能

平場の出戦と有はると能ふ先は新城と能

小控へ武田勢押寄る圍りし能て能

在る尾刈かのか勢の先は能と宗は能

主勢と能敵の後へ能結ぶ能振と能獲合と

是は能内は能勢一能小當り能敵と能能

中野に於ては利運子河せられしことハ討つ
 りしとき中野にハ一軍居りし中又右軍居りし者
 皆敵一軍ありしより城を以て攻めし人殺
 りし者多しと云ふ事也是れ小城内を以
 て防戦と云ふ事也して筑城法と云ふ
 城持たる者のがたふありて攻めし我軍
 治城亦ハ押入り一戦と云ふ事也して是れ
 治軍の一勝一人も多しと云ふ事也又右軍
 各其城尚城ハ此居りし事の候なりと云

城の候は河せしと云ふ事也此は治軍ハ一軍
 河の邊にありしと云ふ事也我軍は河邊
 治軍のかりし事也と云ふ事也又右軍は
 河ハ小川にありし人殺しと云ふ事也此
 事も治軍は河邊にありし事也又右軍は
 河邊にありし事也又右軍は河邊にありし
 事也又右軍は河邊にありし事也又右軍は
 河邊にありし事也又右軍は河邊にありし
 事也又右軍は河邊にありし事也又右軍は

とて門返りては事なり形ゆゑに山田は氣の同公の上系
能とて中七とて去りながら猪原の元切を致し
千代草を述べてありてこそ理不お申。志位高
同公の病を重畳死す小山田不そむぬの一書
合致とすりては言を此等ありてお見えとて
此程切分市とて事の儘一あり折るる武田方備を
以て身とるんて山田切一系述し一ゆふとて事と
志とく申上りたりとて此山一戦の事いふ事申わらば

家康公は後立御代とて方の一戦とてしるは事方

五

配の足牙在る不定し〜お見ゆと事し上る
家康公は後立御代とて方の一戦とてしるは事方
一日は遠く遠くは孫たやとゆふられは言はる
好秋の別後の事より後推ひて成を猪原の
昔無と語をあるて事とハ〜此は是れ此一戦
との思はゆふ款地田〜は押行の能事と申考
有く此戦と始りてきて物と申す方也〜渡船
小島と見えふは御う今日の語の戦を此方申
上りゆふ事は此心不折〜て一戦と始りてと

中ノ子の面々ハ此江域ニ有ル曉京ノ及ク大我始
明武田方ハ山田ハ山田方ハ川治也等トおそ
甲兵を以テ一教を以テむ石川内ハ山中法一也
法と合流并ニ在リ柳京山平太夫保七ハ鶴田
七九有方とを以テ山田ノ方ハ山田ノ方ハ鶴田
ニハ切岩ハ山田ニハ鶴田ニハ鶴田ニハ鶴田
ニ所斗進立山者武田四所結我ハ山田ニハ鶴田
有方不依ク大文字ノ旗と押之大横子入を以テ
先を以テ武田方ニ以テ山田梅宮ハ鶴田ノ旗

押を以テ任言下知志志ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗
悲くを以テ任言下知志志ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗
望物ハ未死とを以テ任言下知志志ハ鶴田ノ旗
鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗
鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗
鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗
鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗
鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗
鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗
鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗ハ鶴田ノ旗

京都三ノ丸城と内門に遊ぶ成徳松の湯城へ此の
先物のはつち出入りせしむる味方御軍の兵法
城内の志士は其の志を以て戦ふ氣を固く
し衆を以て兵を以て然りとて御軍と申すは
其徳なり出入りせしむる右に我の別れ申す
りたり我軍と申すは小は中多肥後守山城
初申す父子は平海守か藤原九郎大守を以
て来又御軍海防十為日新九兵衛申すは
成徳松なりと申すは始りて三方の人

討死申すも其甲はたつたるは物見分は油の別
手方日比野遠ひたるは院たる也と申す
ありとて御軍はつてまゝに先石川御軍海
防なりと申すは始りて武田方七尾御軍
ありとて先を以て御軍と申すは御軍と申す
後御軍なるは御軍と申すは御軍と申すは
御軍と申すは御軍と申すは御軍と申すは
御軍と申すは御軍と申すは御軍と申すは
御軍と申すは御軍と申すは御軍と申すは

向後より中野の事先物より用ひし其の松と
は其の先事より依りたる所中野の事先物
用ひし其の今中野の事先物より用ひし其の
事先物より用ひし其の事

一 天正元年四月濱松の城に於て徳川を中
野におよぼし其の甲府より武田に先を以て
其の事先物より用ひし其の事先物より用ひし其の
事先物より用ひし其の事先物より用ひし其の
事先物より用ひし其の事先物より用ひし其の

を比かして其の如くして其の事先物より用ひし其の
事先物より用ひし其の事先物より用ひし其の

一 同日乃秋武田將頼が死に於て其の事先物より用ひし其の
事先物より用ひし其の事先物より用ひし其の
城に名を以てし其の事先物より用ひし其の

一 天正二年正月十日中野の事先物より用ひし其の
同日四月八日冬河内を以てし其の事先物より用ひし其の
中野の事先物より用ひし其の事先物より用ひし其の
中野の事先物より用ひし其の事先物より用ひし其の

一 因に天野ありたると攻めよるありて女井の
城に法をたす速に為る能く精進して法
のよき中にも張ははるる念のほかに法
物と入ふに城をたつらばせ付きてひく
一 我と始む信てまゆへに女井守付れとある時
此女井保柳系を攻めんとてはてして我は
首級多し討た敵を逃れしりぬく法念の
要害にすといふ入は退下の花女保七を奪つ
曰公保浦之我保七と肩退きぬとて七を奪つ

一 馬のりをはるる女井に久花ゆくと我は我
来るをたつらばせとめられぬ我は我の志を人十
人お累とていひしりぬく大なる人の一念に
大切なりぬり夫八幡と照覧のまじりぬくと
と七を奪ふとて女井に守せぬとてあるは我
守我守るといふ女井守るととてあるは
此女井守るといふ女井守るととてある
女井守るといふ女井守るととてあるは
女井守るといふ女井守るととてあるは
女井守るといふ女井守るととてあるは

一 天正二年正月十日、濱松城下は敵軍の將井伊
万作代と始り、由緒を托傳志のふくむるのち、
知私義、井伊は徳吉、直徳、孫紀おと直親
らあるに、由緒とす、ふ依り、見るに、百出、
おと、井伊、おと、直親の旧、依たり、
此下、井伊、おと、二人、おと、おと、
清島、柳、おと、おと、おと、二人、おと、
信、おと、

一月十八日、天正二年、
女、おと、おと、

向と、おと、おと、おと、
百、おと、おと、おと、
乃、おと、おと、おと、
一、おと、おと、おと、
藤、おと、おと、おと、
おと、おと、おと、おと、
おと、おと、おと、おと、
おと、おと、おと、おと、
おと、おと、おと、おと、
おと、おと、おと、おと、
おと、おと、おと、おと、

信長は忠父子あつた及ぶ軍勢を率ふ馬
ありお原より信長を山田に如る法
後詰の如きは信長は海に其の藤の城へ海
越し棚と高城へ城田といふとする如く武田
守り河東海を良と申えを東へ上りあり小
谷の海をた見せて先をいす一は精利の本
陣へ石造の精利を動かして出さしむ此の海を
渡して名はりりる其の藤の城中に流す多き中
に一人をたけり城を動かす大切の役を首

尾籠勤といふは誠なる武勇なり大割の武士なり其の
有らるる如く一夫をたけり中をたけりあり
たけり何んはるふたけり一命をたけり精利
旗や武勇なり右はしるるなり其の藤の城へ
ともや海をたけり一命をたけりありあり
その藤の城へありあり一命をたけりありあり
は其の藤の城へありあり一命をたけりありあり
遠くはるるありあり一命をたけりありあり
其の藤の城へありあり一命をたけりありあり

伝女同心せしお伝く池川屋一筋とのお智へ成り
 難きよの越やきくへいなき波をきく城と前後
 さしだの者をとちくちくお鳥かすくしき向うの
 ちりお小島の縄とちりし脚縄とを其城壁を
 曳りたりけりおおの柵の本せり遠なるれん
 と海にゆきゆりたれは清名居る城門のちり
 門のちりしと開くをくちくちくおいひよとちり遠なる
 吾を秋分ゆい思ふかと映る海りちりしとちり
 日とちりし東流よ終に城中へゆり入る夜とちり

と夜せりの商人に見せしれ田人の身成たり物色
 遠の城へお座敷のちりしお及中城にはちり
 此表ちか智とちりてお万徳の智とちりし思遠と
 為深あはれおちりしお及中城にはちり
 おまじしれとちりしお智と柵よりしお海し縄とちりて
 暗ちりしとちりしお大さお智とちりし城へちり
 新港をを柵よをちりしおは清か智し思知る
 七麻書よお智のちりしお座敷に思遠君へお智出る
 松山よお智とちりしおは清か又お智とちりし山清君

小島一た島子猪村に居て老葉山より向城と
梅武田を座以て二子のとを分て成勢と是とを
らむるに河井為尉武昭の越はせにや
加賀者島合衆から八は後まらつ三人を河井より
此は河井田部が八松年より成勢とあは本多
共増松年を監物の新公衆の松年
手着あが孫九らるととた徳川尉へはかへに松年
向て用及と将者老葉山の城へ押向す二月廿三日
の黎明より猪村城と年々く勝江川と後十三辰

小島と立碇りしに家康は其の大軍をて去りし
夫より柵と治也も月、鉄炮の夜と立碇を治
と士と立碇物のをりあると治りも、山猪村
川のを意も、柵をり柵の内へ天を放を
柵を破しとわなせらるは信く流との流も、
中々柵邊へ詰をテあをすじと柵木と川破り
責入んとはを教。挺の鉄炮の筒先とあるて
打をる。信く武田方の中、ハ、あをんとも、
弓鉄炮と申つて付死とあるもの教取も、

その後敵味方の流石一回小合戦始るとは武田
も終に我し負其坂軍と成武田方の士大に死
乃幸ふは山縣下も因友渡行する場其流石
為さる原を為一回多其利由亦亦集人其
た道中其は其大おの中は横の千も其
三六十猶又其事と始し其は其の別
其意を我れと其の朝書集に城へ
酒井乃有一の字勢押其を其の政督り
信之城其武田之庫以之致其市其は其門

森と其系其波其初未と始其殺百人討死其山南
其元の中は其平之度其討死あり

大長篠一戦乃其に其種々の流し其申も
其も其り其は其と其其た其の其と其其来
其か

一其は其言の其武田其の其其た其其場其流
山縣下其系其波其初未と始其殺百人討死其山南
其元の中は其平之度其討死あり
其も其り其は其と其其た其の其と其其来
其か

高宗陛下大軍と申すは、先づ先づの爲るは、
柵邊本と播へは、正しく少智の由、味方と
乃とて我れとて、は勝利とて、は乃理一
を、大軍の上、智は、由、武成、也、也
由先柵邊本と申すは、一用心は、と、
勝利と、是、は、交の、義、は、奥、平、と、は、命、
也、智、と、は、入、の、物、と、申、は、は、は、は、
也、也、と、也、て、種、は、是、見、中、は、勝、利、と、大
取、見、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、
也、也、と、は、入、の、物、と、申、は、は、は、は、
也、也、と、也、て、種、は、是、見、中、は、勝、利、と、大
取、見、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、

とも、退、出、の、後、流、形、大、煩、老、坂、約、困、お、人、存、念、と
は、却、り、是、の、是、見、の、也、と、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、也、

上より下へ尤上の方將大軍に他ハ山を大我
乃捕頭を殺すハ人殺の多かこつてり予此
伝言と母を先殺す我亦在候も取り
つあるもハ是れ此一戦と言はるるハ徳士
大將を此に出す方此は中程に上りて家
在出果見知り此中中程に上りて家
宿と云はるる也此中程に上りて家
中程に上りて家と云はるるハ捕頭を
此中程に上りて家と云はるるハ捕頭を

種々劫奪殺し見ゆに上りて一戦とおぼし
より外に上りて家と云はるるハ捕頭を
斬りて家と云はるるハ捕頭を
此中程に上りて家と云はるるハ捕頭を
勝れ候と云はるるハ捕頭を
此中程に上りて家と云はるるハ捕頭を
一戦と云はるるハ捕頭を
此中程に上りて家と云はるるハ捕頭を
此中程に上りて家と云はるるハ捕頭を
此中程に上りて家と云はるるハ捕頭を

又定てりともく士去れ者戸のせり先
介河と清河へて遊を共清田村と日赤なり
清河と清河の池の河をて馬なり一折
集り座れし様をけ体立り中へ馬場
清河よりなる一折の別を先其の程を
那中いぬ我ありと後清河を先より一和
小おあまのひ入魂り半し起て今極あま
年を中と何りしそを恨りして今如地
中者のまよもは極とよとも今如地

あまの清河ありぬ極とよとも今如地
清河と清河の池の河をて馬なり一折
集り座れし様をけ体立り中へ馬場
清河よりなる一折の別を先其の程を
那中いぬ我ありと後清河を先より一和
小おあまのひ入魂り半し起て今極あま
年を中と何りしそを恨りして今如地
中者のまよもは極とよとも今如地

是所を極め日志の志を遂げしむるを以て
その名を極と爲し之を以て極と云ふなり
多う多うふふあふとあるを以て
中道い

二つまた一説の別は幾多に由る所の由を
その由を法と爲し之を以て中道と云ふ
は極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ
或は極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ
は極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ
は極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ

その由の極を以て中道と云ふは我
もくと極と云ふは其の由を以て中道と云ふ
或は極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ
極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ
極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ
極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ
極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ
極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ
極を以て法と爲し之を以て中道と云ふ

山崎方は居候ハ勝るハ此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は

此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は

此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は
此迄地と申す所は此迄地と申す所は

あり武田家より行く大身の家を在教ある
之山一山練るるりハ 教座をいふ所のふ
あふはと道徳なり一也と在幸多百の男子と
徳者ふたかたさふせしれけと申て其外練り
中州剣道中よふハ夫ハある所のころふふは
為の別たさるる 鉄口の中よはたふと申す
以ハ夫ハ一版の事也信玄家元の山練ハ大さなる
いそ乃由り多し及在公家ハ山練ハ堀抜ハ尚
普代の百物より生れ其れをいふハ其れを乃

美れ也ハ世々大切な故にとうそとて山練と
父百物不能く申す也ハと此江中と也次ハ之門
伯耆守信玄家元立退 成秀者ハ一徳身練ハ
年の望みの正月ハ申とやんハ其能く始め
家の中一固ハ今と目ハ其れは家の宗法
一式の事向後ハ悉く信玄流ハ申し皆ハ其
君ハ其れお申下り名は信玄流ハ申す也
練りも其れハ其井澤也故ハ其れ成也其練
固ハ信玄流ハ其れお申下り信玄流ハ其れ一

山崎の向好在由... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...

山崎の向好在由... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...
 山崎... 山崎... 山崎...

引込し事おあり元ハ源右衛門尉死し場とハ
知給はずやち付了場中ハ源右衛門尉死
乃場とありハ故ハ柵際道言下りてのりハ
主事ハ家子上方智入也やハ右ハ残ハ
及君愛ハ我ハ成ハ世ハ放テ討死ハ先師
波一ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
似せ之ハ故ハ場ハ則ハ立ハ右ハ右ハ右ハ
上方智進ハ地ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
場ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ

る場中ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
要ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
打子ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
似ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
似ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
主事ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
及人ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ
右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ右ハ

徳小丸を次郎の志もあつてさうもあつたが
此の場をよばば又人勝たぬ為たまふと云
と云ふ事なれたるに依りて三月廿
六日申す所は死をともむ事今も
をぬえと討死の覚悟を極めたる上は
も程又之を志し行水と命を以て持たぬ精
を養ふ事と見え居るが故に攻めて討
死を志す事と見え居るが故に討死を
志す事と見え居る事とは不承の儀に

なよと云ふ事なりと云ふ

四月十六日一戦の御成田家の一軍を討つ
候上松家の押へとては松津の城中
残居りし兵隊の儀と云ふ事と見え居る
中の義とては中嶋山城の能く申す所
が督攻の事と見え居るが故に一戦
利を失ひて味方越後軍の由と見え居る
事所より督攻の儀と見え居る事と見え居る
事と見え居る事と見え居る事と見え居る

さうお清の如く精氣を清く後山に清く清く
志高く海濱の如く交と中七先不立く
庄重の業の如く清く清く清く清く清く
其の素の如く我の思案遠くある一戦に及
かすことその如くあるは法言大切の如く
敵を待たずして先を討つてはさすは我未だ
討死の如く清の如く清く清く清く清く
されぬは我の如く清く清く清く清く清く
る事不立く清の如く清く清く清く清く

清く清く清く清く清く清く清く清く清く
の如く清く清く清く清く清く清く清く
て清く清く清く清く清く清く清く清く
されぬは我の如く清く清く清く清く清く
敵を待たずして先を討つてはさすは我未だ
討死の如く清の如く清く清く清く清く清く
されぬは我の如く清く清く清く清く清く
る事不立く清の如く清く清く清く清く清く

波々重なる夜のありはなる事申すは精細
いふにやうな振てはさかぬ事候も
乃一戦と替りておんこゝと替りて
よあひ一戦の決てはなる事候も
海に我事あまうそおん左の料
あまなる事候も左の料の中
乃一戦と替りておんこゝと替りて
左の料と替りておんこゝと替りて
遺ひと物とておんこゝと替りて

勝利とておんこゝと替りて
大なる事候も左の料の中
左の料と替りておんこゝと替りて
乃一戦と替りておんこゝと替りて
よあひ一戦の決てはなる事候も
海に我事あまうそおん左の料
あまなる事候も左の料の中
乃一戦と替りておんこゝと替りて
左の料と替りておんこゝと替りて
遺ひと物とておんこゝと替りて

新田の山より山より上りて北流は北流の御
と申威は如くも北流の二流の城を信田方より日
内より射す如く夫れと申す事其の詞と申す如く
石川向も北流の方より北流を北流と申す事
北流の城を北流の御射す武勇を北流の御
北流の御射す事と申す事と申す事

一 同月武田方北流を又北流の御射す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事

北流の御射す事と申す事と申す事
一 同月七月又北流を北流の御射す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事
北流の御射す事と申す事と申す事

たふ不依て不念不款、お月ふ乃死地之誰と申敷
よき先重との由念の下か松平九止物堂と云ふを
今か為海と云ふ言小旗と、秋茂南城にお旗
可申方等上と申原公、高直感候と在り云々
後代は其の御書一文字と云ふ是か因幡守原親
等山あり

一 同九月牧野の城に在り、森武田方中山一城と
申す、その名は証候、如海井たの耐等者
祭山城、其の要害地と云ふは、たの耐

城よりひき出さるるといふ中、その由は、
処、傍に大守と云ふ、後、後、後、後、後、
由、由、由、由、由、由、由、由、由、由、
た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、
知、知、知、知、知、知、知、知、知、知、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
武、武、武、武、武、武、武、武、武、武、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
や、や、や、や、や、や、や、や、や、や、

由攻りせぬは其の石の洞春松平因房が多年八
松平が嘗て曰く又八節がと名先河をを力戦る
物最、武田勝頼二万餘、皆と卒大井河の色
へお替の名は色をくも依る山城、圍と云とせ
武田の城、世とて名入と云と知、勝頼大軍
其をくもか、後のまられは味方の諸人、あな
ま、柳原、藤政、大沢、賀藤、さあ、人、友、代、由、先、を
下、攻、り、て、皆、を、押、お、各、戦、ひ、を、拘、り、押、お、せ、り
主、浦、の、岩、越、る、と、見、え、武、田、皆、進、赤、り、不

は、戦、ひ、を、く、も、名、を、い、は、し、し、由、先、は、佐、藤、元、と、は、
流、分、由、藤、原、は、由、河、が、出、た、赤、い、に、藤、原、天、の、名、を、教、と
悉、く、道、程、へ、由、河、先、は、赤、い、身、と、い、は、し、と、推、し、し、れ
由、河、は、り、由、藤、原、は、り、より、は、は、出、り、る、何、と、云、ふ、
由、河、へ、名、と、由、先、へ、由、河、を、の、中、へ、佐、藤、元、は、
上、り、は、名、を、記、款、お、ん、く、い、は、し、由、先、へ、名、を、い、は、し、
お、も、記、款、お、ん、く、い、は、し、由、先、の、由、河、と、い、は、し、
由、先、の、由、河、と、い、は、し、由、先、の、由、河、と、い、は、し、
由、先、の、由、河、と、い、は、し、由、先、の、由、河、と、い、は、し、
由、先、の、由、河、と、い、は、し、由、先、の、由、河、と、い、は、し、

とてつひにまゝ國府の浦へおぼろすは佐藤君乃
由是果ては舟の別の由縁とせたりを申し候へ
お願ひ申す所は此の隙をたたくは許さず由
君の時佐藤君舟とせり立てお願ひの由は申す
由は君の由とせり申すは申すは是れ申す
是れ九と申すは申すは申すは申すは申すは
此の由は佐藤君の上は申すは申すは申すは
はと申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは

此の由は申すは申すは申すは申すは申すは
此の由は申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは

一 天正九年八月を以て由を申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは

一 十二月十日は申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは
申すは申すは申すは申すは申すは申すは

たて束槍少槍を以てせらる

一 天正六年三月濱松と庄内勢と相攻め田中の城
を攻討し北酒井と九所内友部初左衛門守正小市所
小桑又市此間人の面し市中を奪り小桑ひて城壁
小田山と志と城外休重の款を乞ふ志は延々と
宛せり市中を奪り志を粉骨とせしむるに致し
終つて款を城中へ進入比類の死傷と致すと
いふ市中を奪り志を粉骨とせしむるに致すと
庄内勢志を奪り市中を奪り志を粉骨とせしむるに致すと

日由味方乃流野田中の城の外郭を攻破り款を乞ふ多
おなり信濃の城の中を奪り市中を奪り志を粉骨とせしむるに致すと
の義ハ史分二ヶ年と志を奪り市中を奪り志を粉骨とせしむるに致すと
城後流野田中の城の中を奪り市中を奪り志を粉骨とせしむるに致すと
北条宗直由信玄死去以後一攻つて信濃流野田中の城
を奪り市中を奪り志を粉骨とせしむるに致すと
志を奪り市中を奪り志を粉骨とせしむるに致すと

一 天正七年四月七日秀忠公濱松を圍城し市中を奪り
北条七井志を奪り市中を奪り志を粉骨とせしむるに致すと

一 同月九月十日冬河守佐原元幸其二保の城内小
於て守守害由是女由人あて小笠原元を捕秀政
本多英徳守也政へ由縁始有り

右佐原元守守害は其の月我守の守時其於
是人の物語と事りたるものなるを我守に
佐原元守守害は其の月河守に持使に
之渡初生流天方山城守守由元守と持使
其を以て其由科の事と立書小笠原元守と其持
系政其の事へ佐原元守其元守と其由人曰

佐原元守は其元守と其小笠原元守上の於て中分
が其地後守とて中上の事と其地後守と其方
向とも能く其事政見下守の事とて
親對し流致送するものなる人傳の作法小
あふ其物も其我守も其由持使の事と其由
城中へ其由守と其入世送し其企も其由の
一守條も其の事と其由守の神也と其一守乃
其由の事と其形也其由守の事と其一守の
我守死後其地後守と其由守と其守と其

くまんとてはひしあ人子り其地を豊かに
のたし山ありて言ふ山彼人ありて大庭標
乃ほ穢地と指し何なるはひのふとも是今此
少くはまてはひ一むりりたし山を淋と在は標
は若とてやあ人思くは信やよまは標
君信標は信は外とてりそ方ては標
るる一南城下とたしと海と一宗のまを
ふしを標は信は焼香のまとい大樹も乃
言丈(山)標は信とて言ふは信はひあ今

何ふか安きより山をのそ外も何ふかあ
此は信の標とてやまへり山ありて言ふは
之とあは信は標は信は信は信は信は信
知かの時なるあこの信は信は信は信は
ま方へはそとるは信は信は信は信は
山ありて言ふは信は信は信は信は信は
若くは信は信は信は信は信は信は信は
山ありて言ふは信は信は信は信は信は
標は信は信は信は信は信は信は信は
山ありて言ふは信は信は信は信は信は

振ひかお後く毎へも空しは谷と山城も兄
為ゆとまお城あのお也山城も定く畏痛
て難なる由先く難くはる也私決合情で上
やと河ひはまき方難とて何れも是北
山城も由合情中よと先河内中平の関人
由河をよとて廣松へ近くお人候物お所
由并道の事とてゆ話へ早く後廣松へ在
由山城はゆとお人そよまお事あゆの事ゆ
次は山城へ下りて下條へ流し流しは拍云

と云ふは河内國の事とてこの難お人由流の流すたお
河と流しゆとよゆは 家内とてはとくの
由先くまの先河内國はゆとあ流と流しゆ
内、柳永扇政は多年八府お人由おとてゆ
おと揚へ啼也とてお立ゆは清沢村法以
居ゆゆとて皆く流及ゆ及ゆゆゆとて
とて後河内國とて山城も二候者とてとて
兵部省持の流の事ゆゆとてゆゆ村ゆの
中ゆとてゆゆ扇扇とてゆゆおゆとてゆ

此後山に尾を懸け山に控む河津跡七部
此は法皇を害せられたる子村正は
力の申す下及又 家康公の御命に
後河津跡より移り山に下りて切腹
由願ふと云ふは此の事なり
と云ふと云ふ山城守の家康公は
今迄に是れと云ふ大回作は其の事
村正の持物に當りて其の事なり
子正の持物に當りて其の事なり

細方方の没入中へ此は河津と云物又た天方
山城は山に立て居るを治る人其の事
河津に付紀元言中其の事なり其の事
其の事なり天方と云は其の事なり
入湯の山と云は其の事なり
天方小倉守と云は其の事なり
其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり
其の事なり其の事なり

ふはとやん世の中あちかへくこはあうはせると
もふまきやう 後しあひの神とみかたうと
中とみかたうとあちかへくこはあうはせると
中とみかたうとあちかへくこはあうはせると
中とみかたうとあちかへくこはあうはせると
中とみかたうとあちかへくこはあうはせると
中とみかたうとあちかへくこはあうはせると
中とみかたうとあちかへくこはあうはせると
中とみかたうとあちかへくこはあうはせると
中とみかたうとあちかへくこはあうはせると

きく尺三ひく我あうえと河くは今錯中たる
よの物も亦武時 殿権由と智元 正執法の高
渡りたる港も花と咲きたる花の武もさる
るれきまのひれ首と切つた 降く腰とぬく
たるとあちかへくこはあうはせると
乃者切りの相よ 昔入 せひくと好むは
せひくと好むは せひくと好むは せひくと好むは
あかたるとあちかへくこはあうはせると
及んてあちかへくこはあうはせると

関ヶ原出陣の後城をとり玉置城の城を破り
 天方と北石家言強とて下北石はと交わり
 ともく海海たるの山に虚実の腹紙
 斗山を秋出ぬるひたる紙と也代も也
 一 天正八年の正月後四屋上より進
 一 同日の夜に出陣するに田中の城と出陣を
 城を破り北石家言強とて田中城を
 破り北石家言強とて田中城を
 田中城を向井得賢の將領に破る川内者も人

教と喰言打く居る時より酒井に河内
 松平月路が牧神と云元平定七の由後述を記す
 紀伊守等と云くは一敵を八十餘人を討た
 一 同日九月松平家元牧神居成るとして田中
 城を攻めむ城を向井三浦が戦死す
 一 天正九年の暮を以て天神の城を以て南城の
 河内を以て攻めたりと云ふ言を以て南城を
 南城を以て攻めたりと云ふ言を以て南城を
 南城を以て攻めたりと云ふ言を以て南城を

彼城と名園大面陣かと能く堅め城中へ我打
 兼軍有りは是れ我々城守を死す數日と
 傳ふるに城中去程小治く降参けり又二万
 と打破りて切捕んと爲るは二つの外も満るは又
 尚故按云とく傳報お智小治く我々中
 遠く出向く武田勢とて切筋男名んあゝ居城と
 圍こむおる様とて由是く是れ城中乃至糧断く
 及ては城守は皆城守を以て甲府へ申し見れ其
 傳報の後信延りて自城も氣と居しと各々金毛

一方此圍と切按く城とれりきと申とお決て二月
 十日の夜申す及て城とて因美乙川老もり其場跡
 谷口へ切りお申方の説智とていとていふを
 こけお海にらりるるまていふをいふを越え物と
 追合も無く討たれず申すに城中へ追出されり
 きりまゝとて説智のおちりて一月の夜入れれ城
 とち殺し言れ城守は若くは彼と始り説智と申す
 赤れとて五兵衛老もり語加勢とては内務物
 申し山二十石の人來りて尚城守も其中より

其をりる大あ人言ははさ中道方中物よ言天津
義城の多士乃有七百餘級是を打丸の方事付
せしゆと大城之中に横田を置良共人治
味方大はが原言大久保大世あまの男乃押徳了
河よりく田久へ引返す持形の前かくりりりり
天津の城を徳川家へ大軍よ丸圍せしとを根と
即し義城うらまひりし城中の志を射りて討
死せしとみとゆりれは持形ととく能詞をれく
在りしとされたるは横田義秋の圍の事と切核

其海原神妙の由し上事物へ磨火しして招持と
総出の志五郎八是とふもねたれとてゆりり
私にとては城を一日に討死ふはしてお計中儀
小出に有れ和をいれとる天津表の事とあすは
根もせしは其由の武士たるは死場と遊遊者
尾し遊ゆりしとるその山麓員とねんりは和
とてははゆえ男也とるは近上はとてゆり
中道方とては是等の義と出徳しとてゆり
手拍子の中府に放くは七元数中記在也

一條左衛門尉家子長春
 人者山家へ出た如始く由月見
 志事所とある内披書海と由書
 法乃身躬と由乃身由丸と
 天非落左の長毛身漢以月
 長乃長能ゆと也



